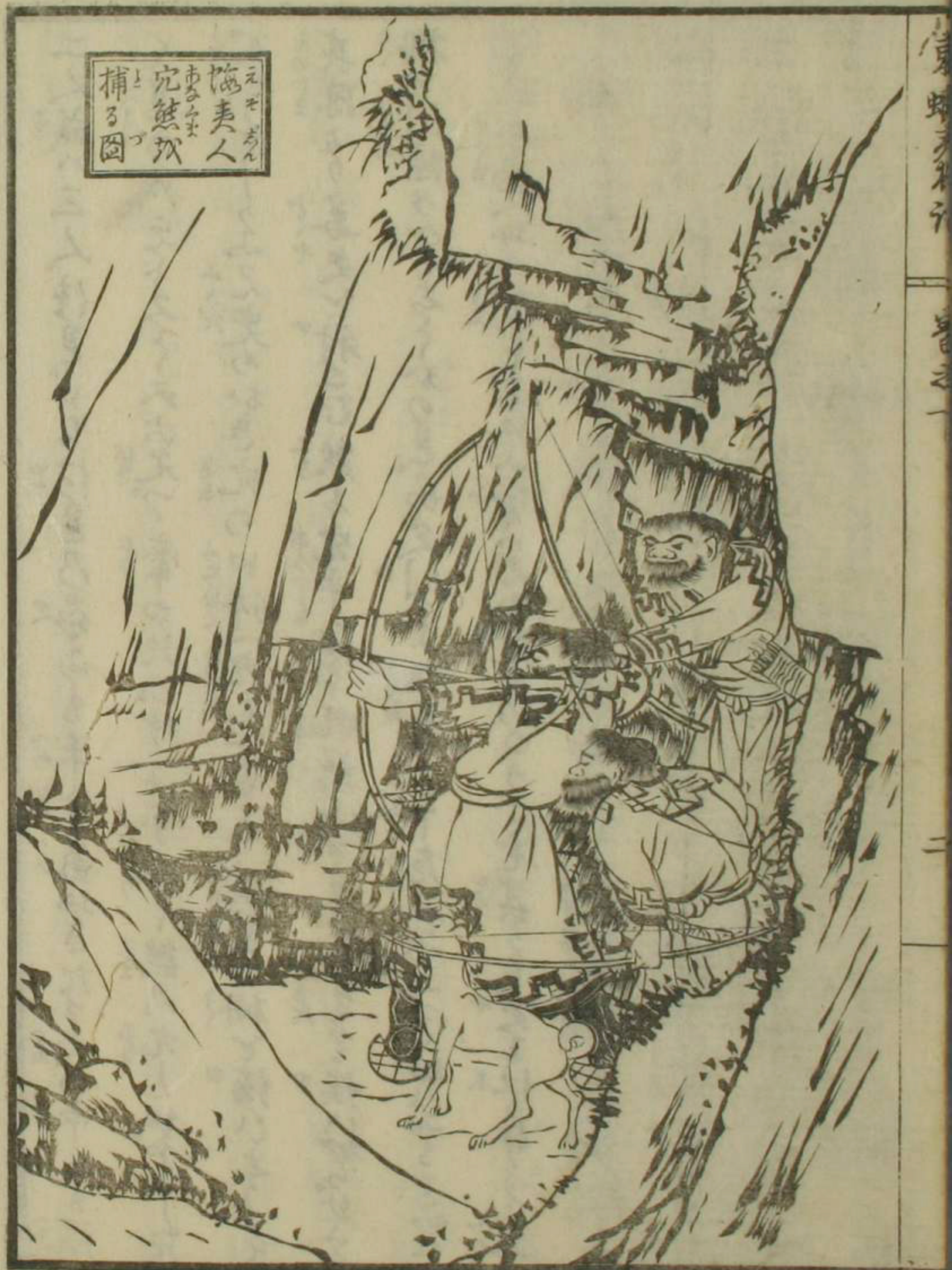




子為生之宮
 七里香叶堂
 中



元
 市
 究
 捕
 圖

卷之一
 一

さくは下へまぐり来るぬちの大勢乃男女熊の居る牢乃口をさ
くといひまぐりて格子状らちく躍るをいふはさるゑまぐりてその日
を舞悦びて入る者ありて色く式法ありて礼をば酒と
盗り舞揚着を添く是れを客の式と云ふ飲むことより凡こ乃
うの時をかりやはは度乃とれひるゑは客一同熊乃前より又躍り
ぬ休あうて畜ぬ牢の蓋状をたすみたり熊乃首に縄をつけ
ておどろけけるカムイの場は川にゆき首縄とをぬぐれど中
央より抗へ熊と繋ぎ置まて大勢を躍り送ること前乃ごとく熊を
口より吹腫みくまきく怒り呼吸せしめく吼り相入るがく美人縄の
端より引出せぬ合衆子候乃弓矢めて四方八面より射出せにそ乃矢

熊筋とくく熊乃身はたつとを吹まて細長き木の先へ笹を付するを
とくたちる者候たらひ落ちくまのその後をより透を担ひ射く
且つ熊をかまきく相ひをるまのて死地のはが乳りく育あげるメコ
の危きともは躍りて休工ともども熊乃今限と云まきらふ地ひを
つと淋然とまき秋き如はみ熊乃ら矢候たらひ丹く一のるりき
る板より熊の勢おとれくるこはれはめの本持出くやそ熊をかま
首と捕めり美人大勢がよる壓かきうり抱ひおははまておとて
押さきまらかくまきこと殺度熊乃息のま絶ぬは二聲に祝詞を奉
げ給ふに茶やまき設けかきカムイ乃座を居る備は依りて酒酒飲
まき酒を飲供さるこありあれより元美をカムイ乃前を圍居てまき

東坡志林



東坡志林



遠言ふまわをく父サカモイナクの骸乃下に埋りアツケシ國志寺
遠言ふまわをく 父サカモイナクの骸乃下に埋り アツケシ國志寺
 本郷三子志の二子して 徳持と尊師として 既終むと云ふ事ひるしとぞお寶子
本郷三子志の二子して 徳持と尊師として 既終むと云ふ事ひるしとぞお寶子
 初年の事より死今そ乃兄弟衆のほど二十五六日越らん
初年の事より死今そ乃兄弟衆のほど二十五六日越らん
 小寺より一めふら其性伶俐しくとく内地の子態と見死更言信ふ
小寺より一めふら其性伶俐しくとく内地の子態と見死更言信ふ
 色ト英勇を父の事象成徳きたりさ且安政卯年徳東西の徳夷
色ト英勇を父の事象成徳きたりさ且安政卯年徳東西の徳夷
 地すまび所願とよりて公より許ぬの有目達成はるまは去信とあり
地すまび所願とよりて公より許ぬの有目達成はるまは去信とあり
 此國がに化しやまぐく地をごとありとどるも口徳夷を兎角拒み
此國がに化しやまぐく地をごとありとどるも口徳夷を兎角拒み
 官見さる養徳乃その事 ありふ却くまわく事情とさしを風俗とあり
官見さる養徳乃その事 ありふ却くまわく事情とさしを風俗とあり
 同志さ美中と及流もふむと此國人もをさく分らぬ取は波みふ
同志さ美中と及流もふむと此國人もをさく分らぬ取は波みふ
 佛仁徳の流る不とアツケシの知縁るふみ其少自る者をもえよとの
佛仁徳の流る不とアツケシの知縁るふみ其少自る者をもえよとの

示教小出の阿多らん クスリ。アツケシ。子モロゴ 所願以前をか乃兄弟アツケシ乃
示教小出の阿多らん クスリ。アツケシ。子モロゴ 所願以前をか乃兄弟アツケシ乃
 赤き里 許炭焼ふ小照けらと慨然とて世然わろ胸の烟ハ炭竈と
赤き里 許炭焼ふ小照けらと慨然とて世然わろ胸の烟ハ炭竈と
 折ふ小まがる兄弟が老志月日成せまき居るふ乃意入知縁る
折ふ小まがる兄弟が老志月日成せまき居るふ乃意入知縁る
 折る性々二人成はるくみら且意市中に秘め帰ら且あるが其内
折る性々二人成はるくみら且意市中に秘め帰ら且あるが其内
 二人のめ成炭焼ふより呼出し汝去人てふものよはしまるこふ於て己
二人のめ成炭焼ふより呼出し汝去人てふものよはしまるこふ於て己
 との格匠乃身とより見シヤケロク成酒六と改め身のサシケトモを三五帝
との格匠乃身とより見シヤケロク成酒六と改め身のサシケトモを三五帝
 とありとるまのつらぬつきく酒六を衣をよはし身を熱名にる一ふふ
とありとるまのつらぬつきく酒六を衣をよはし身を熱名にる一ふふ
 お目アツケシ場和信中如且等が母の病小卧しと死ると性々業と
お目アツケシ場和信中如且等が母の病小卧しと死ると性々業と
 此つらなりとふ獨且く夫サカモイナク此相治まこたひ兄弟が因はる
此つらなりとふ獨且く夫サカモイナク此相治まこたひ兄弟が因はる
 ありとも成流るがに言ゆく公の所和量と感勝るま成ゆくがまわく成
ありとも成流るがに言ゆく公の所和量と感勝るま成ゆくがまわく成

後多おきぬ ○ 餘庵按さるふ阿部在任の熊の月乃捕のこ諸卒系に況
 く上は清の李心術乃金川瑣記に曰く熊は人熊馬熊豹熊猪熊の口種
 あり予がらん取れたる物熊蓋人字の誤生むる熊は五月三日
 毎人乃てく立ちも是も人のてく遍体黒毛たが心胸の骨に白毛あり
 偃月のてくとのふまは即月の満るりま馬熊といふの恐らけ選りて
 人と割き諸款と害するもの

○ 美人酒六ある日地の日酒りてり凡アイノ乃る食の英飲るまども最
 冬の酒の味ありて雪移りて山海の嶺をさるる酒と此を強食料とさ
 支ゆるとするるりさやあててアツケシみの酒を飲るる永世をるること
 ありては食料とさるるらび飢渴の年ありともお知安く今日と抄り

既酒六が祖父すくハクスリの土人るしが飢饉に遭くこのアツケシへ
 ありては飢死を免くまてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり
 アツケシ入江のたぐ中に獲るるてりてりてりてりてりてりてりてり
 宇坂安盛と云ふ田舎者なりおの且管椽中の樽をきりんとまると人てり
 かすてり酒をせ携へモチフ小坊みくる人海を舟本を携ひ集めて火を
 燃かすの酒と振りてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり
 のてり表炭録吳坂園とてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり
 蟻即牡蠣也其初生海島邊如拳石四面漸長有高二丈者蟻
 巖如山每一房內蟻肉一片隨其所生前後大小不等每潮來諸
 蟻皆開房見人即合之海夷盧亭往々以斧撲取殼燒以烈火蟻

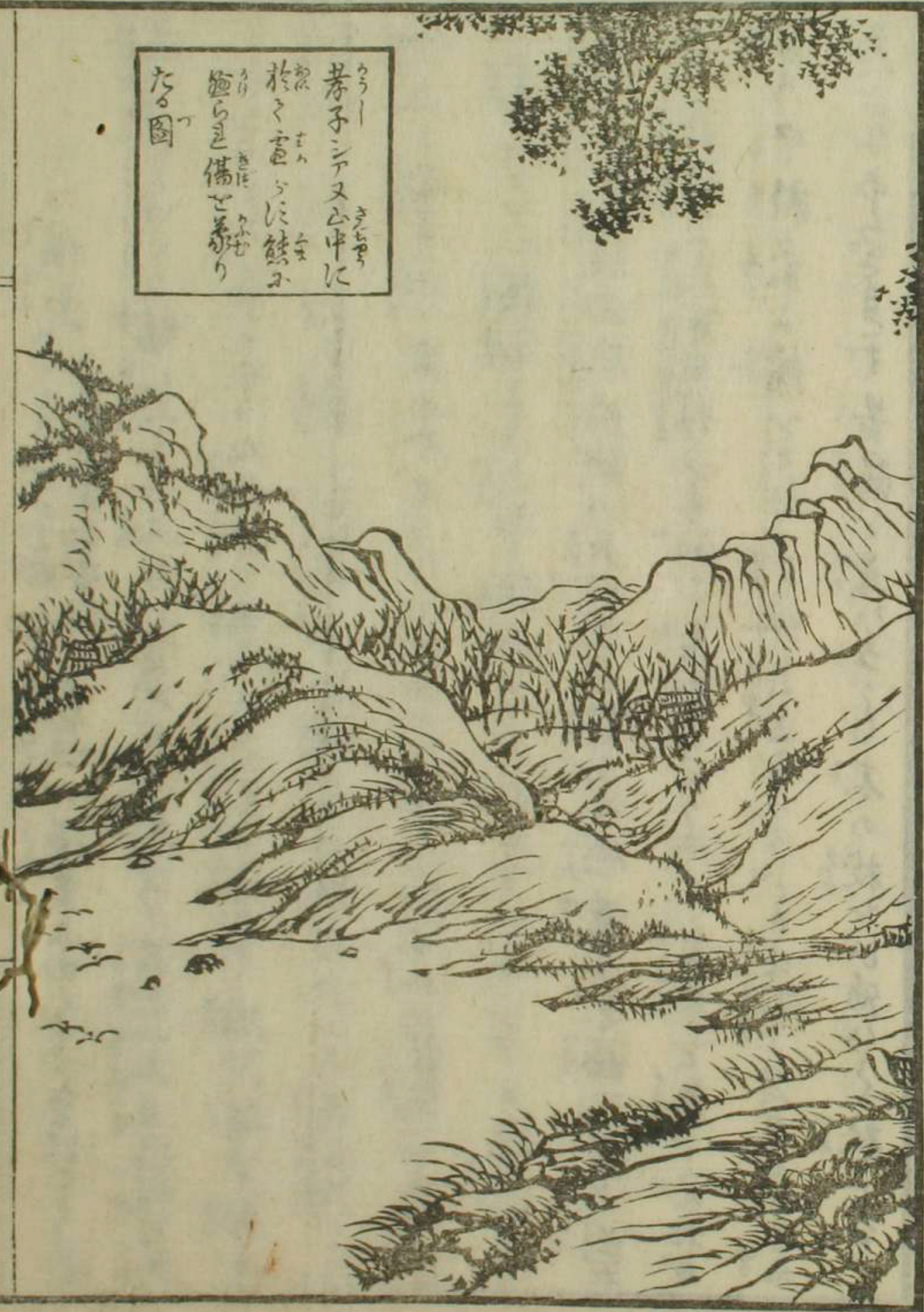
即啟房挑取其肉貯以小竹筐赴墟市以易酒肉大者醃為炙小者炒食肉中有滋味食之即能壅腸胃とあるを且且南方乃國中も鰯の生ぐく山吹るざる不もあつたものと云ふもアツケシは鰯も其形狀他は異なりて殼の幅二寸許長さ一尺二寸五分に肉を僅に三寸に是らひ丸まき遠方へ贈らんとするに殼と去り括は免陸灰まきくはまきさき其味糟劣なり

左苗領紋別の孝子シア又乃度

○サル領モニツと云ふ不兄弟此去人あまなり兄坂チタライオとシア又との父をさ死乃と病はあま母イルチャロのそ病あま且とも平生持病は難まき一日とてまき日あまをさ上兄チタライ

あまは腰弱く不具乃身よりまきさたる業もほしゆまき不向の用とくハ馬の荷鞍状細工ふる一歩の目ひとまき口灰粉まき乃と母まきあま力なり且ハ弟のミア又まき且灰まきとまきあまどをまきあま色ふのまき性質孝か乃あま且漁業の隙みハ灰粉まきあまあまさらり母乃漁業のミアの糸も母の目ハまきフヒヨウ乃皮灰削ぎまき二目灰あまかき寸灰あま母の目まき居てか法きつらまきあままき漁業の人足あまと死あまの目灰細ひあまあま母の安吾灰彷彿慰めまきまき干魚その他食料子あままきもの灰丹添まき母の件あままきあまあまあまあまア又ま例年出稼とて彼岸に送より十月の末つたまきの間西北

考子ニテ又山中に
 於て書々に於て
 極らざる備とあり
 たる圖



亡き人と再ありひきさるるごとくいへて地のをらひなりあを
りく墓をあつちよきぬことありとぞおのほ按むるふ夷人の情態死
ちくわくをみむといふを必控薄るるにありは然長痛疾のよる
む深く渾然たる朴直の質然矣稱するふ是るあり葬のこころ
出せむこころ贅をは

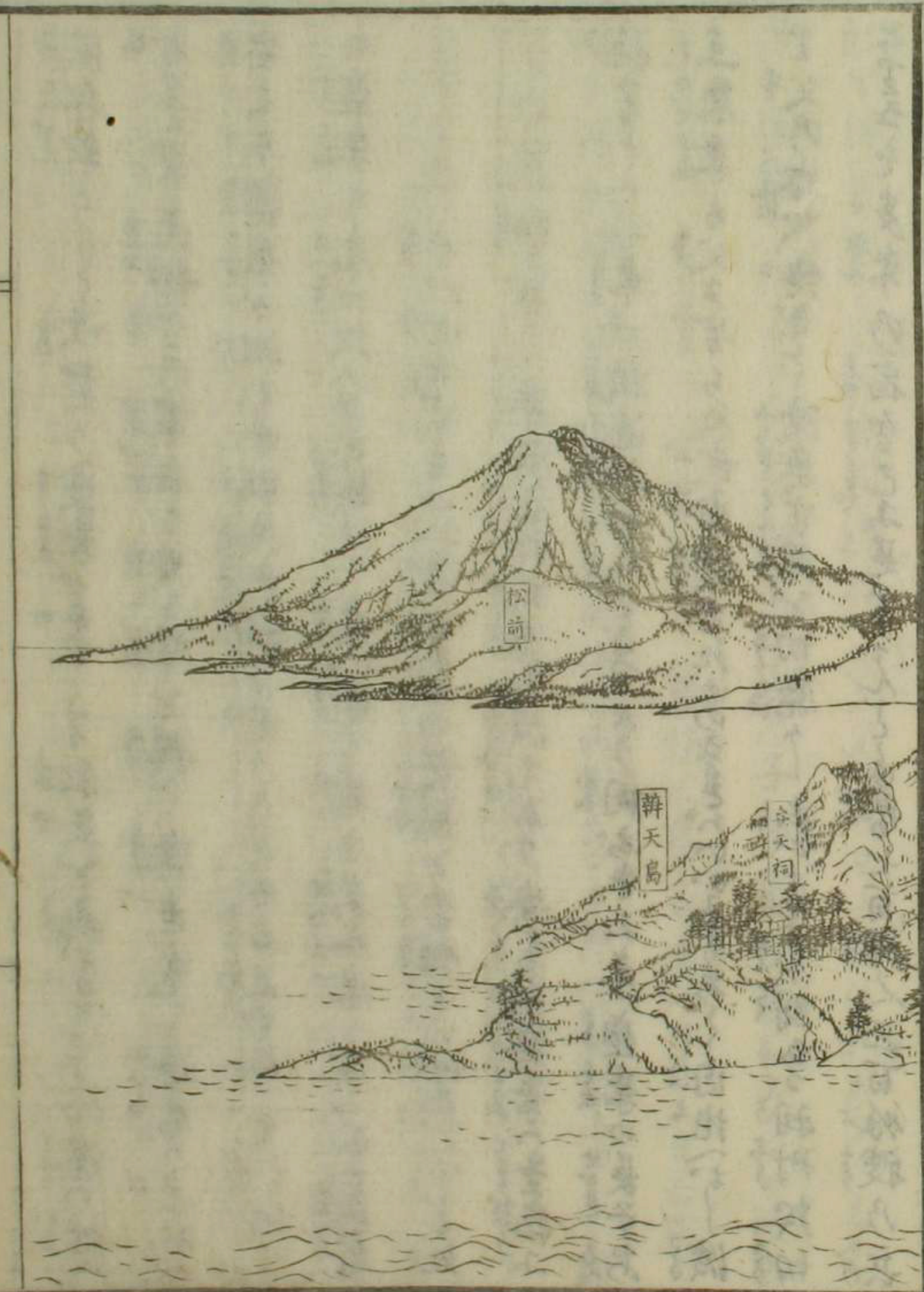
松前乃肇基 兼 東振夷あくオキクルミ乃濫儲

附 由味方コタン乃事

○ 塩夷地乃權輿最奮く往古 景行天皇乃征東より

後明天皇阿都乃比羅夫城きく 騏田淳代津程等の酋師と率
あく塩夷を伐ち其地を殉に遂に治を後方羊蹄
今シリベツといふ内地の富峯
小幡をとりて塩夷を討ち

ふふおきく帰るといひよるを後度軍帥と向けるとあるを
其のこちんちんあちちんさうのえのむらまろ 塩夷乃地は討入り荒微と驅
る意く東の地収め海小園を塞城為一曠園乃塩夷地を法
極きより塩夷人乃王化は涵濡を亦も全く田村將軍乃勳功を
偉るるとときをより遠六百五拾年を行く足利將軍義政公の世
嘉吉二年癸亥十二月十二日下國安東を盛季とのふの南部大膳大
夫義正と合戦及び一が戦ひ利ありは遂にうち負津種乃小泊より
渡河松のさく逃れしは其時順風よく船を引りて如何と
きと進退を究むる所次永若坊道明といふ法師乃たよは船を
乃が彼法師肝膽を碎きて城を破るなり行りかた不思後や巽乃



武田右衛門佐廣
 初め松前港海
 たる園



風忽然こつぜん吹ふき盛さかるが季のありし私わが矢やと花はなをそがどく遠とほの沖みぎへ
 出いでるなり南みな部ぶ方かたの軍ぐん兵へいを衆もろと聲こゑと揚あげ岸きしをまぐ追おひきり見みれば
 安やす東とう者もの盛さかるが私わがを救すくむ助すけ助すけと去さり乃すなはち力ちから及およぶと引ひ返かへり
 ぬ盛さかるが虎こ口くちのぐと種たねをく食たへ渡わたり着きき矢や不ふ来きるといふを著あらわ
 たりさしむといひ世よもぐも十二月十二日の疾はや風かぜとを明あらわしむとこのと死
 よりぞといひ初はじめささく年としあはれむと文ぶん安あんと改かえあり安やす東とう者もの盛さかるが病びやうに
 罹らむとこ乃すなはち秋あき遠とほ行ゆくの人ひととささく同おなじき三年盛さかるが長なが子こあ
 東とう康かう季きを父ちちと劣せらぬ武ぶ勇ゆう道みちを死しぬるといひいひのちあはれ内うち地ぢへかへ渡わた
 里さと父ちちの志こころ燃もれきく陸りく奥おくを圍かこむと切きり磨あらうと志こころかへて本ほん國くにを羽う州しゅう城じやう切き
 とささくを多おほ年としの宿あき望ま己おのれ不足たりとささくと勢せい七しち百ひゃく人にん三さん百ひゃく艘さう乃すなはち兵へい

私わがと浮うぶ海うみと渡わたりまの津つ控かへ攻せみ入いりて戦いくさひ利りありと
 終つひに陳ちん中ちゆうに死しにたり乃すなはち康かう季きが亦また乃すなはち子こ郎らう黨たうを其その和わより己おのれが隨まつ
 流ながりきなりそより五年改へつと寶たから徳とく三年辛しん未み八月廿八日若わか狭さの
 國くにを清せい和わ源げん氏し武ぶ田でん文ぶん昭しやう吉きち史し國くに信しんの婿むすめ男をとこを乃すなはち信しん廣かう故こありて本ほん國くに
 次つぎ立た出い陸りく奥おくへ下くだりは小こ南なん部ぶ乃すなはち田でん名な初はより私わがと浮うぶ海うみと渡わたり内うちヲコジリ
 とといふとたえく渡わた海うみを附つ從じゆぐといふといひ依より本ほん三さん部ぶを傍かた繁はん綱かう工こう友ゆう九く部ぶ
 右みぎ邊へ門かど尉ゑい祐ゆう長ちやう等とうより時とき時ときふ當あたりて相あ兵へい國くに防ぼうを政せい亂らん河か野や加か賀かを政せい通つう又
 安やす東とう康かう季き乃すなはち舍せ才さい政せい季きが目めを潜ひそむ最もとるを同おなトく渡わた海うみをといふも
 武ぶ田でん信しん廣かうの武ぶ勇ゆう子こ歷れきき目めを大おほく信しん廣かうの麾もと下に屬ぞくせざるめ一人は
 信しん廣かうを渡わた海うみ乃すなはち天あまの川がはに居き住ぢゆうはしたるもまことの國くに勝かちふに被おひと築き

出くそ款待けるふ位廣も其産ふなるもく玉次把る種々の考ある
らち竹乃端切の吸物中に黒き小石次者て猪口ははけく出り乃端切
等ハ着然とくくや喰らんとする小賢く去る齒さざま小石を丸
く口に入且どこも勿論喰ふと乃かかをねを食ち折敷ふさ一盛き
坐きぬうさま終ひ慈うう居るうち位廣故て著次さりあげ竹の吸
物さきもなげお居るうつ玉次めらしまる猪口小盛りう小石も次
うら且は苗長等ハく玉次入く公の中に驚きおそくかく堅確ある
ゆの取食する大將玉次はもる玉次ら且ぬ嘉傑まりんと舌を巻きてぞ
おそ且は其時竹乃端切の吸物も位廣獨菊の吸物さく小石とるを
たるハ黒き煮豆みく皆是美人次長抜きりん一時乃計策うりま

よめく本を砂原警の本まぐ乃美人西ハ然石頼田内まぐ松前入
まるといふきもきらびは時正二年丙子乃妻のよめりしがシウリの被治
村ハ根美の苗長一人来り不仔細やあまらん被治が廢りし刀次を苗
長次一刀は刺殺しぬ去乃送娘よめく城美人ども業と終ひあかてよ
増起とく九五月がわと國戦止まをこまが島人氏多く死を明ま
長禄元年丁丑城美人まの増起してシウリ乃館主小林右郎左衛門良
景次攻る工急りり且は河野加賀守政通中登二郎教通佐友三郎右
邊の季則服奉の南條治初少輔季遠松内初の館主藤吉甲斐守季重
景初の被主今半刑初少輔季友松前の中後下國山城守定季相系国防
守政胤初初田の被主近及田守右邊の季友原口の墨初六右左邊の季重

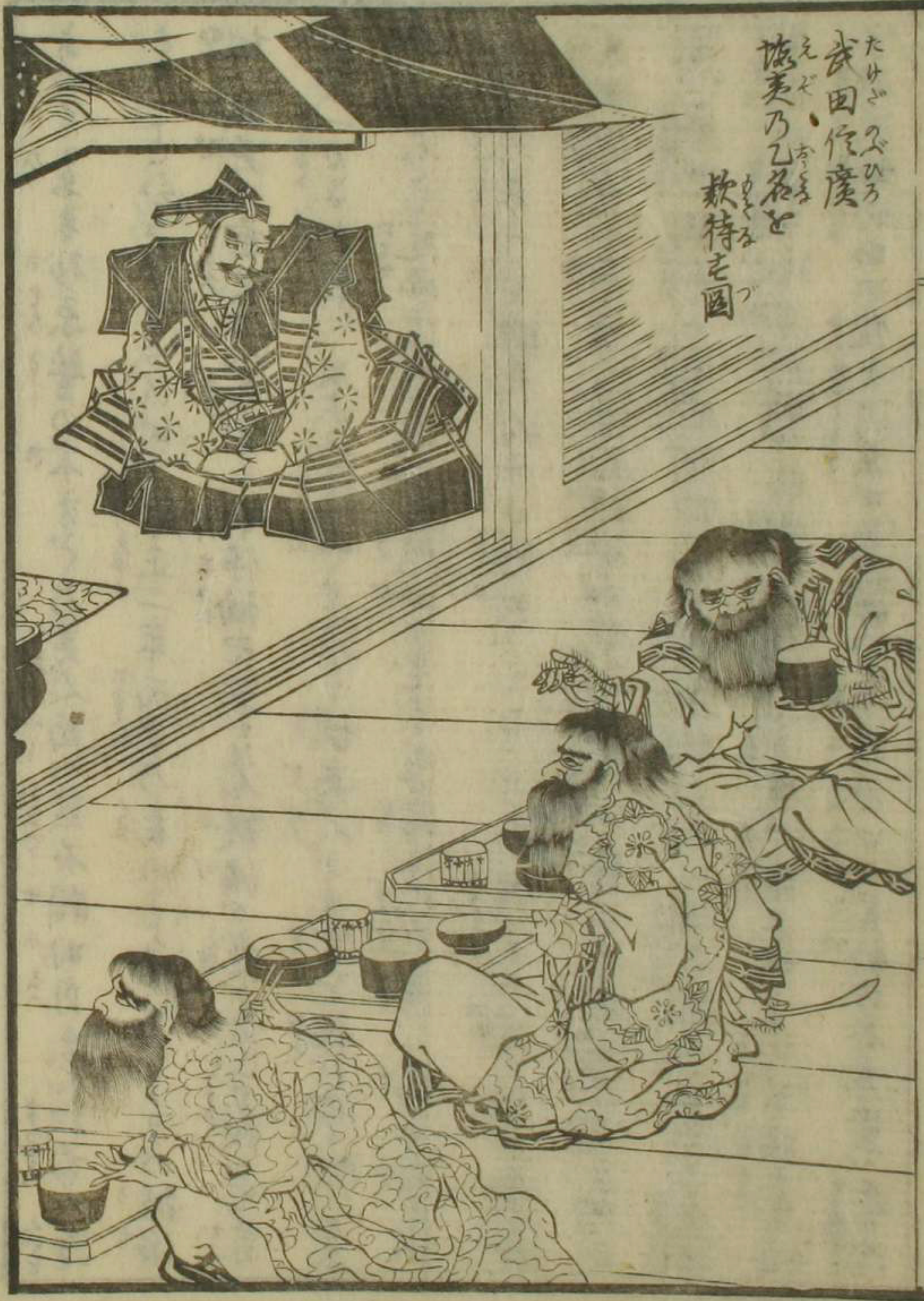
貞長原次郎 卷之下



武田信玄

飲茶

十一



大けいひろ
武田信玄
えどおま
塩美乃乙名と
款待之圖

武田信玄

飲茶

小石の原右近將監等の一門救百の軍兵城、延徳一、小林良景、後
々、取、城、美人の、楠、籠、り、る、葉、鹿、城、は、成、る、ま、し、聖、宣、年、に、及、び、く、及、逆、乃
魁、首、ら、る、コ、シ、ヤ、マ、ケ、ニ、ハ、子、其、他、乃、眷、属、等、救、指、人、次、捕、へ、く、る、東、首、を、茲
小、石、く、城、夷、め、比、十、の、一、を、平、均、一、日、を、退、ひ、月、を、奪、ひ、く、夷、人、は、も
帰、降、を、と、く、も、廢、瀾、ハ、城、夷、地、佐、廣、乃、武、成、盛、ら、う、と、之、も、ま、く、遐
阪、の、地、ま、ど、及、び、び、ぐ、殊、に、東、越、ハ、サ、ル、ユ、ウ、ゴ、ツ、乃、夷、人、張、勇、ふ、一、部
中、も、ま、ど、は、松、前、へ、攻、め、来、ら、ん、勢、畏、き、こ、え、け、且、は、佐、廣、大、軍、城、後、一、東、西
の、城、夷、城、切、廢、り、輿、地、ま、ど、も、入、ら、ん、と、思、ひ、く、と、し、一、が、佐、廣、定、業、あ、り、
は、ま、く、病、の、為、に、遠、逝、を、享、年、六、十、四、回、小、明、應、三、年、甲、寅、丑、月、廿、日、う、り、
法、號、を、荷、遊、院、殿、清、嚴、寂、真、大、禅、定、門、と、謚、る、内、外、上、下、悲、哀、お、噴、び

つ松前創業のまゝ厚く其式を死かこみひき乃法去かこの
いとも既に徳を脱きたるに氏族門系族中に寄呈集ひ評議一宅
あありは且は生摩はまきまの各血城軟子と誓ひ城を佐廣の長子
宮内少輔光廣とまき其業を終むむ改め改め若狭ととり
同日五年下園の城恒季院季の城教と相承三希季胤城
調防も政とく松前の書後小代らむむとむむ村上政義かをひひり
とのあまうとくも光廣勇悍不羈父は少ら然く四境を守り政刑を修
むるも一族郎徒心成傾もさるははきくまの永正八年辛未の四月十六日
ウスの癡茶小こり石倉三ヶ取乃彼城夷人の為と攻落さるより逆進
あやうりこのと死シテリに河野孫次右衛門季通政通の小林孫次希良宅

同氏小次布季景 同氏小次布季景 遂不利して自害を同十一年三月光廣乃嫡男良廣百八十餘艘乃
 兵船と浮へ天乃川の彼と相おく 兵船と浮へ天乃川の彼と相おく 松前の勝山城引籠る上の國乃景
 橋崎二帝も廣二皇親衛る翌年乙亥橋崎人等上り上の國を侵さ
 よ一汪進軍を以て六月廿二日若狭古光廣自馬城出て橋崎の魁
 首カノイチとツノの兄弟を討つ其骸と小彼の支之埋む今橋崎城と
 其の二皇親衛る 其の二皇親衛る 其後享祿元年戊子橋崎乃酋長タナケニツノの典
 堂七百五十人城引率おく 堂七百五十人城引率おく 瀬田内押寄せ彼皇二孫九弟友忠祐兼と
 攻む彼乃中お折おく 攻む彼乃中お折おく 防禦の士卒甚少おく舍弟祐致上の國不用
 おもく性きたる苗おこれこも且六祐兼一人勇次奮お防ぎ戦お志直天

多勢乃美人の攻たてら且修二討死とぞおらるタナケニ皇親田内の
 彼を急おし勢破非乃おく孫おこれつこの國を押し寄る是時二帝祐致
 上の國を苗おし見祐兼と討てお梁おしお瀬田内の彼を殺しおら且
 けしおを皆髓お徹おいおもおく渠知らおらり見祐兼が悲魂とぞら
 さんおのと胸中に一針と殺さるおと取心の跡おしお且六タナケニ皇
 親おく追ひ来る祐致おしお且六上の國に疎疎おくおもく瀬田
 におきおらりこの王城をく城中へおし合おしこころおし彼を二帝
 廣橋の上より狙とさだめおしおをまかり門をく遠と放るおやまおし
 魁首タナケニが呪おえをらしらおく射おしおらおに放るお屋の下
 貴とせらる美人おしおの之將乃らおらるおらるおらるおらるおらるおらる

右往左往を教乱るを城中より許多の士卒練波とあげ貞教と
切て出に討れまことに追ひつる我孫小早をけし二并統領
等兵に珠兵二百人城門具き頼田内乃彼一併見且六城人
本戸城固め入道たは統領と怒皇と喜あげひひ多の
兇夷等が振舞ふ汝等よりや統領タナケこの國乃珠非ふ
今和院と討ふは汝等ととのを統領と城をからん虎の
候も統領と汝等ととの速に汝等と命を助は好きと二百
餘人とひとまゝあはれ射出を毒矢ととともさびに二並二攻
是も流石に猛き兇夷等も冠首タナケ乃討たりとゆは
戦の力ふあけ珠と推くは目くと珠兵をよ追討し首級を成

擒王暫時かうちに兇賊をきく浪田内は統領より其後又天文五年
六月廿二日西越美乃酋長タリナととのを大將とて徳石の
一揆と起り其勢凡五百人道日松前かあきんとをむ松平侯の
者若げうりは上の國に二孫二并統領と先鋒とて
廣二百人と引率と西越美一揆向ふ速に一揆と珠兵と
平均とぬこのタリナを東部乃タナケが婿とて男は廣が為
討且にこれハ吊殺と殺きととつ天文十五年丙午四代徳
季廣立つ氏部を補良廣乃婿男とて廿八徳内統の彼を
季通乃孫女とて季廣相續とて武名と遠近は廣一海
大小名孫の珠と藤と屋と東西乃越美地三十里外と統

遂にクナシリ夷人城を捕ひて其をけ作事の時よりたゞの全くその頃ナル
 シグル乃勢盛るるを以てクナシリ夷人の捕をるるを統言成推しこの不
 より引返さしむるもヨミカタコタニ乃勲功をとりしと安政三年丙辰
 の夏サル諸の中間より大西氏根其取れ乙名とす一は以夷人城を出し
 去り支配人の子に性改を伺わぬつてこの道までの勢風とあらざる由國の
 風俗も化し中なる人並流ありたる事ナルシグルクル者おもと
 判官義経の遺風と追慕し確乎とて此の治習を深きるを種々慈
 訴し及ぶと大西氏根元夷人向つてくる事今度インドカムイより
 夷地の者もこの國乃臣民とひくく厚き法撫育を多るにこそ
 程くも幼ぬをみりて遠育さしはるわすは皆を産科とほくを産科

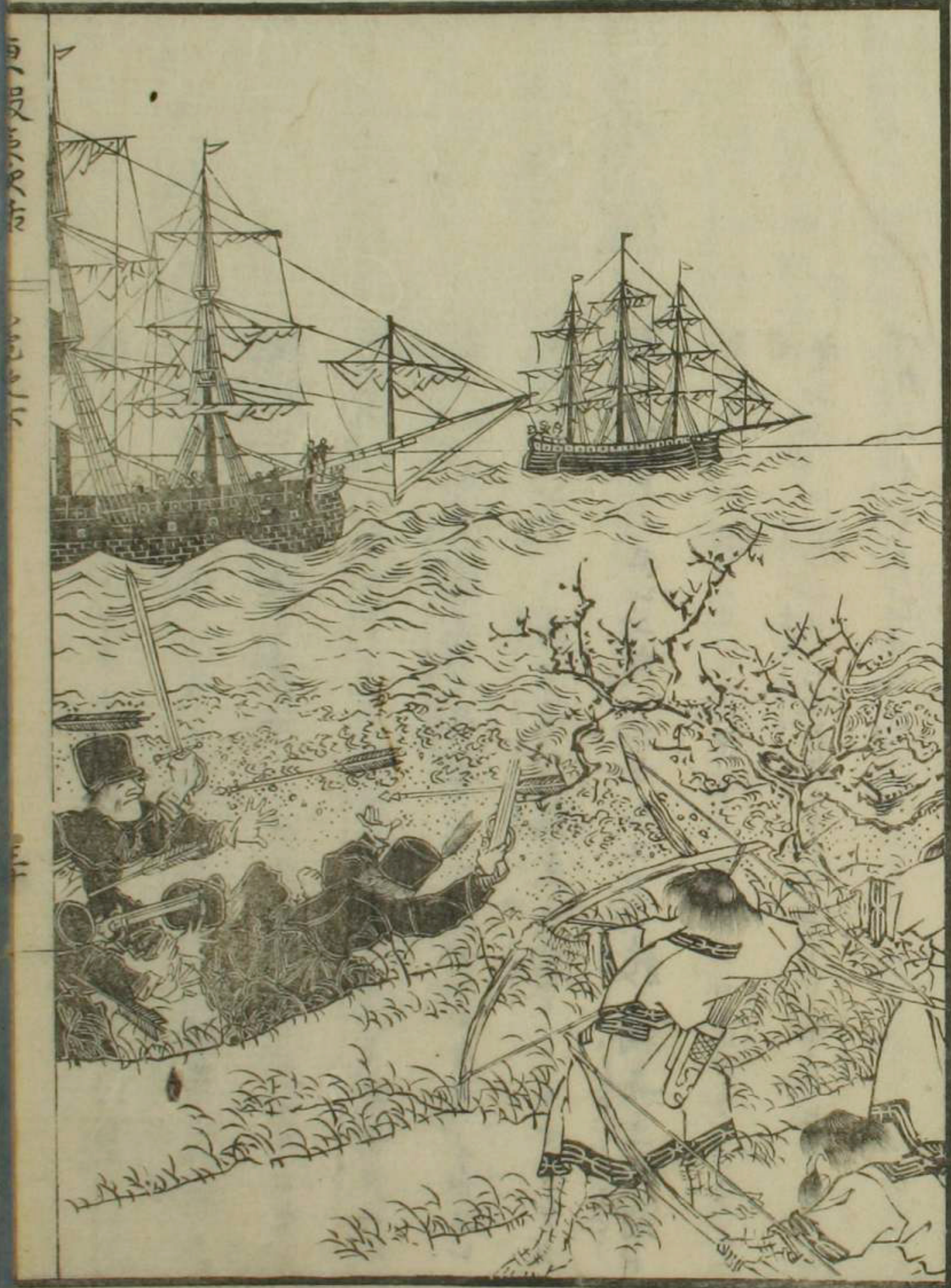
ある判友どのの素直源成乃痛流ありかこも尚今インドカムイ
 とヤシキ事ハ別係承祖宗の清裔よりとらるるを以て判友どのの素直源成
 も因り理よあそあるれそ追々ヤシキをばし備すは汝等第一
 振夷乃地小旗より其愛のこたあり或は其邦乃船の襲ひあそく境と
 侵すことありて死をいかにゆるるやけんそ道等の気格をきりまろしと
 いふとこれれハ物小きせべんケレ去産れイコラシグルの友人きりみ出くやる
 ちさんゆきへくサルコタン乃者ども彼古より中合を松前カムイ（味方）
 希りしより粉骨碎身志くお働の遺風を今ひくかこより中さびこをひ
 公乃御差差配にお成り上りまわもサルシグルまじあを何事まじ作付
 らは次第一層の力成はしは振夷の地におく授礼のことありたり

國乃私の上陸は(比國を耻か)むることとゞくふ於て其時身命を
 抛ちヨミカタコタニの名は使はるべきなり今其部より契約乃
 擬美人奴誣言僅なき即時小田五千の勢に集りやまべく忠節のこころ
 はきく物に松前カミに限りやまば其は終るあらを身ひそと改と
 おめり胸を叩きそと述べたる頑愚乃美人よりも斯く義勇の言を
 奴主張は赤公の程をあらわしぬるも全く清徳風乃そく不且有司達
 の寛宥は承蒙はゆるみららん夫乃依を褒賞する多ハサル然るビラカ村
 乃惣乙名ハフラてふもの米若干芭錫よりなる其ハ後

ビラカ村
 惣乙名
 ハフラ

一

其方依親とよき イヤニアナキ子。テイタ。イカシ
 シロワ。 申傳依相守 アイノイキリ。ヒシノ。
 イタキシユカト。ヤエコ。シツカシマ。 伊方
 コタンと唱ゆもの シミカタコタン。アリエ。エルエ子。
 イヤナキ子。 勲度忠功も有之ハ故と云
 シユイク。トノエレシカ。アノカイト。アヌワクシユ。
 兼て厚く相心得 ランマ。パアセノ。ヤエラマツテ
 ワ。 尚場不土人共一團(能く流流坂加) タバン。
 コタン。アイノウタレ。ラビツタ。シ子イキン子。エピ
 リカ。ケウトモ。アウバカシヌ。 年来持隠



西の國より来たる船

十一



おみまの
 山崎の陣
 者ども赤人と
 戦争うち勝ち
 たる國

東の國より来たる船

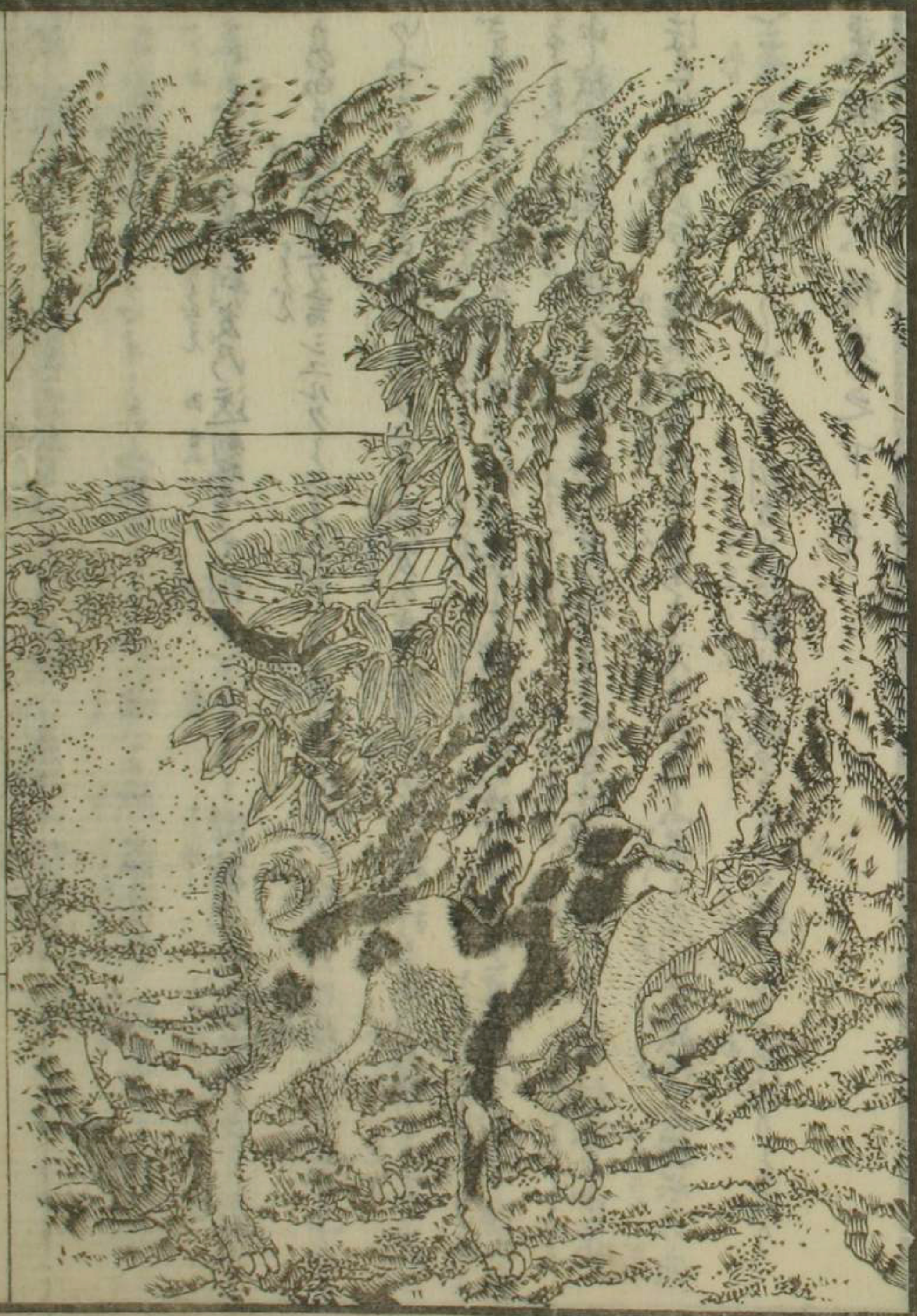
十二

殊そと 夕子ゆしタ。バツクノ。ラツ、タラ。アンカシケ。
 老年らうねん 及およ以い追お。ヲン子おんこ。バツクノ。役やく義ぎ大だい切せつニ
 相あひま勤きん以い義ぎ特とくニニ。ヤクヲロシベ。イランマカ、
 ヤエコ。シツカマト。ラムチエ子らむちえこ。エカラク。カ子かこアアンク
 シユ。米こめ三さん俵たわ為な瓦わ釜かま。シアマ。レタラ。イツコレ
 ル。エタハンナ。は上かみ共とも俵たわ瓦わ釜かま之の。イマカケタ。
 子こワ子こ。トノエレンカ。レンカシユト。能よ相あひ交ま出だ人ひと一いつ同どうト
 ピルカノ。ヤエラマツテ。アイノウタレ。ヲピツタ。シ子しこイ
 キン子きんこ。糖とうヲを徳とく志しへ。コアリキ、ピリカ。イ
 バカシ。イキナンコンナ。

松まつ前まへああくく山やま味あじ方かた販はん夷いととのの元もと来きたサルサルグルグルよりより始はじめママシシトトアアクク
 明めい和わ乃の前まへ販はん夷い乃のソウヤソウヤル、モツペモツペ乃のソウヤソウヤ。英國いこくのの和わ且かつ渡わたリリ母はは乃の
 非ひ乃の乃の交ま易いととのの或あるハハのの取と奪だつ探たんとと自みづか己ぢ人ひと由よし産さん業ぎふと
 失うしなひひ終つひはは運うん轉てんももウウふふとと面おもて見みはは東とう部ぶ乃のサルサルグルグルはは度どとと借かきき
 乙おつ名なのの亦また集あつ會かいととシシビビシシユユムムケケルル也なり。西せい販はん夷い。ソウヤソウヤル、モツペモツペノノウウタタレレ。
 フウレシヤム 赤あか人ひとと。のの為ためニニ販はん夷いとと活かつ業ぎふととるるりりかかねねるるよようう若わしし事こと
 故ゆゑ棄すかかるるをを渠か必かならず強かち勝かちとと故ゆゑののシシユユムムググルル乃の地ちをを替かへへ食くふふもも其その方かたりり
 故ゆゑにに志しとと死しとと松まつ前まへカカムムイイ乃の大だい事じととりり志しとともも控ひか縁えんははししととししととしし
 いいをを死し人ひと救きうとと強かち集あつめめ九く千せん人ひとふふむむりりたた故ゆゑイイシシカカリリ裁さいとと箱はこ部ぶへへ出で
 後あととと目め子こ捲つぎぎくくソウヤソウヤへへ到いた着ちやくるる。箱はこ子こいいとと何なにひひとと自みづか己ぢ人ひと由よし産さん業ぎふと

くよりう食物を運びきたりて飲るるに於て抱きしる上臈の如の爲り
中々。其の終るんとて息乃緒もつたれ其の光陰をかくるるに
上臈の如の因縁ふりて一十月を経過はしる男子あり
たり其終見をアイノと呼ばれりて今乃世もも撫夷人とアイノ
とのふりて其系をたどるる素より終るに死すといふはたれば
すこ撫夷地の人は何より堪強きありといふはたればたれば
庵古乃昔高辛氏の少女とりて畜かきたる條執といふたは素あそとに
二年のぬ六男六女とて其子言信休傳好んが山屋に入て平曠と
まひる辛氏其言よあふひ場ふは名山度沃といふも其商は滋養
を野ちく養夷といふとありたは按むるに後人は昔の信をとりて撫夷

地のヲキクルミに附會するものありん我を関元濟がら其別本故の宮古
をいふ都方より祀瀆さす貴人の信をとりて宮古といふはたれば
上臈もこらるるより其部のシブチヤリ(漂流するものらん備す)上臈の
業ちくオヒヤウと唱ふ方言本の皮と捨るるは積る衣は織るるは
今アツシといふ又この事ぬく網と造り糸と捕まへる食物ははらりたり
いふその星をとりてゆるふとて人民も強えたりがは國建久の吹源判
官義経孫倉右幕府の爲小内地より其管をたたく撫夷は傳ふ渡り今の
サル領乃ハイノサウシといふ一止まりり矢をとりて多敷に捕まへ地を報き
粟稗と搗き食物とほりて数年はたしに復たなるとありて判官の古蹟あり
かこに跡より神祠ハサルの云ふ許に初傳をさすはオキクルミと稱する

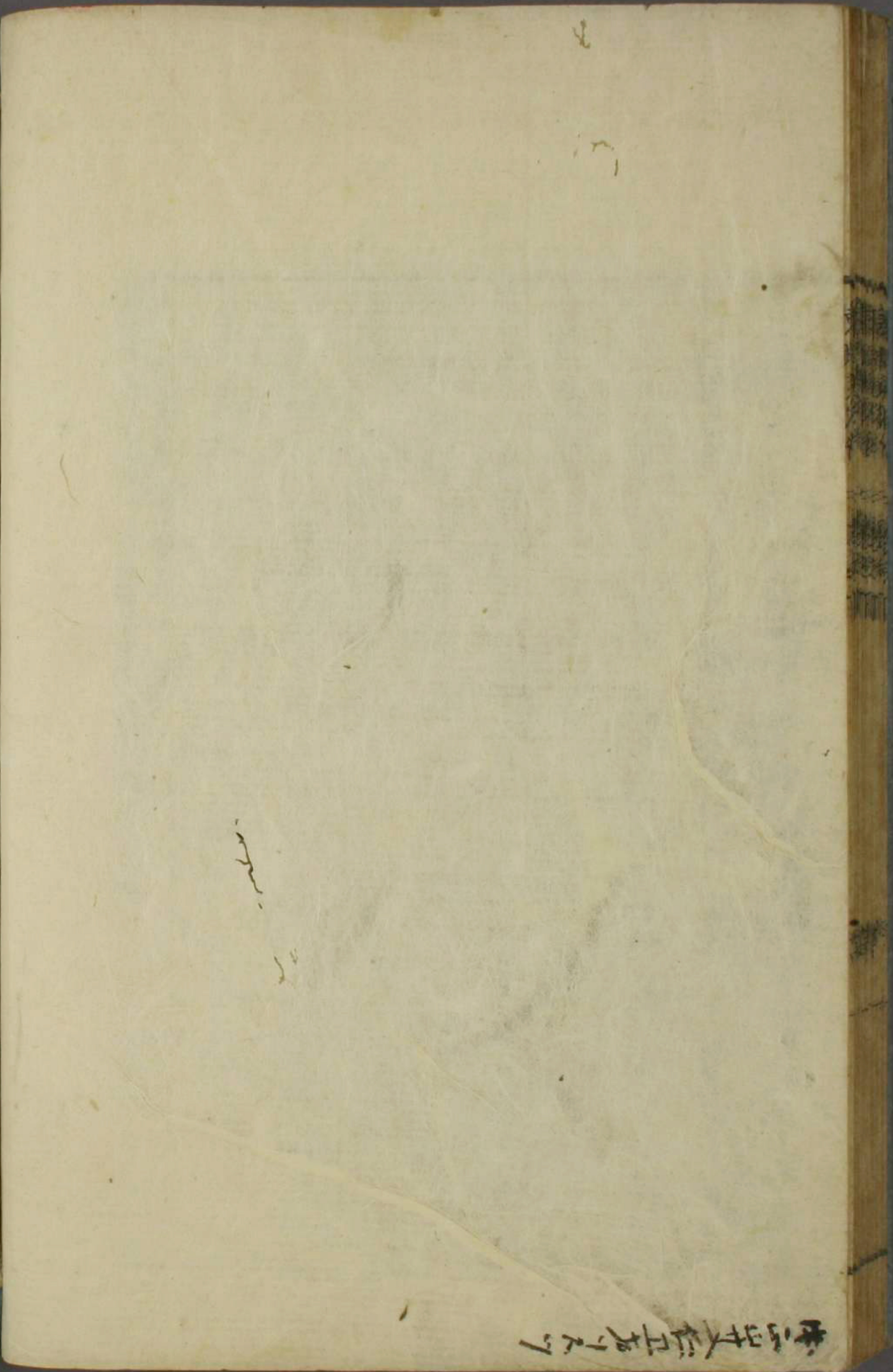
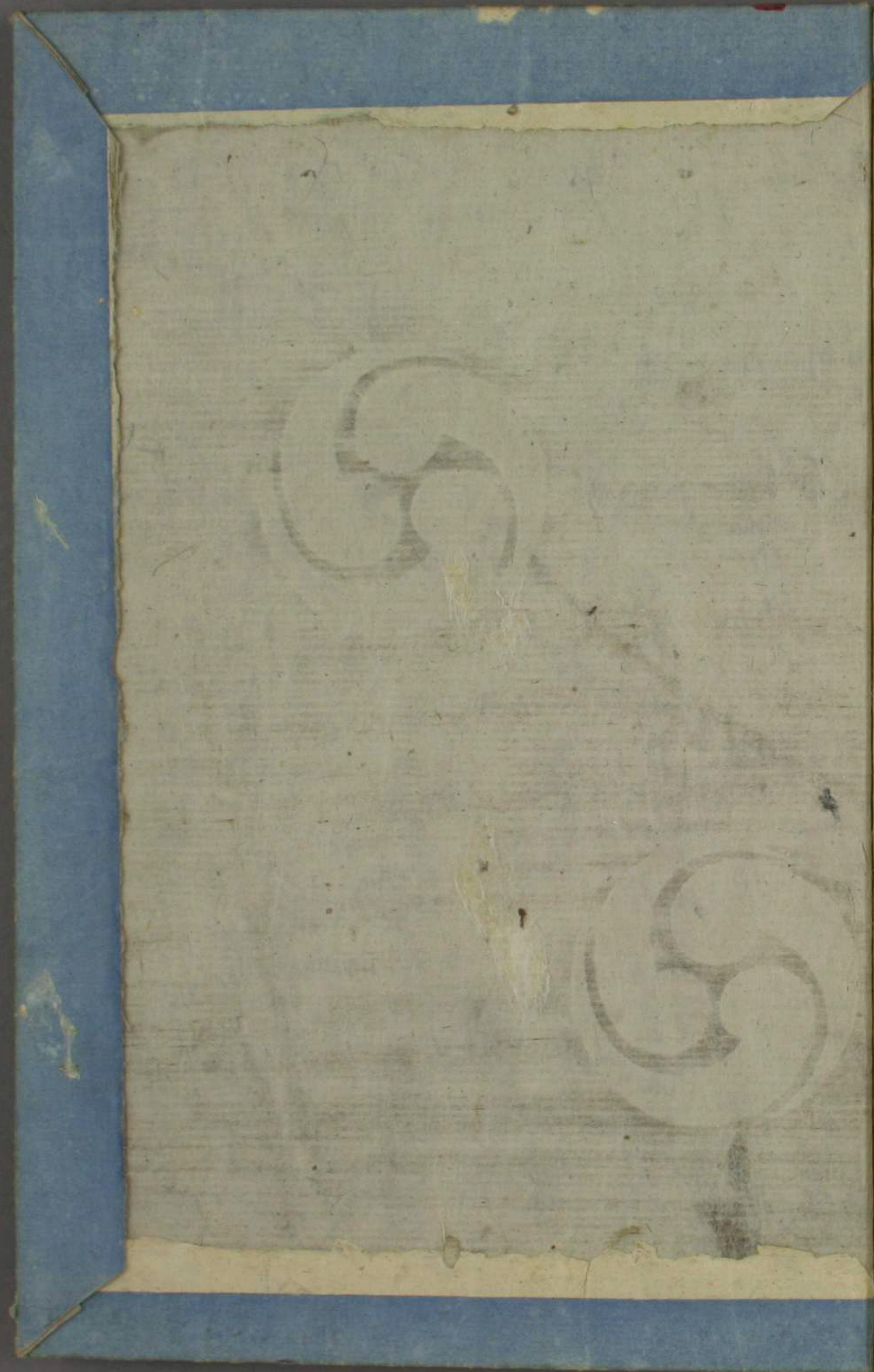


上方の上籠五
部のニフチヤリ
海崎源流として
女の者小巻るの
柿園

波上稿の工より判友の扱をばまらるる美之義理と判友のわたりクスリ色の美人
 を教養とヲキリマイとのみ成りこれの唱よ作後意あり振妻より今も用る
 毒矢とのみの判友乃選製ありて附子をまらるる擬猫などの毒虫成るる製法と
 のあり附子乃方言ニシルクといふべし乃毒由ニシルクといふは山國の毒とまら
 りて工よりまらるる附子ありき判友の事實今も確證するは美地と文字のわら
 ざるあり判友在函の振妻成理歴して韃靼地へ渡りて其地を成るる寛政
 中城を乃國神保乃源頭建別源流を乃小系建都の國よりわの振妻も小系へ
 はまらるるを乃建妻奴兒部の色ありてなふ家との門は義理と辨妻の條
 と畫に掲げありと判友の韃靼地へ渡りてと顯然なる後ありとあり

東蝦夷地活卷之下 畢





Handwritten text in a non-Latin script, possibly Chinese or Japanese, located at the bottom right corner of the page.

